

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	成田 太一
学位	博士 (保健学)
学位記番号	新大院博 (保) 甲第 24 号
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
博士論文名	長期入院を経験した統合失調症患者のリカバリーの検討 — デイケアを長期利用する中高年男性患者のエスノグラフィー —
論文審査委員	主査 教授 小林 恵子 副査 教授 関 奈緒 副査 教授 宮坂 道夫 副査 教授 村松 芳幸

博士論文の要旨

本研究は長期入院を経験した中高年期男性の統合失調症患者がデイケアを長期利用するなかで、病状管理も含めた生活の実態や地域コミュニティとの関係について当事者の視点から記述し、リカバリー概念を用いて分析を行った質的研究である。研究方法は文化人類学の研究手法の一つであるエスノグラフィーとし、9か月の予備的フィールドワークを経た後、1年1か月にわたり、精神科デイケアや家庭訪問により、参加観察やインタビューを行った。研究対象は長期入院を経験しデイケアに3年以上通所する40歳以上の男性統合失調症患者9人であった。

対象とした統合失調症患者の入院期間は平均20.8年、デイケア利用期間は平均8.8年、利用頻度は週4回が6人(66.7%)、家族構成は独居が6人(66.7%)であった。質的帰納的分析により、対象者の地域における生活の特徴として「長期入院による社会的なつながりの喪失と孤独」「地域での生活を継続する条件としての病状安定」、「支援の主體的な活用による日常生活の維持」、「デイケアメンバーとのつながりの継続」、「地域住民とのゆるやかな交流の希求」の5つが見出された。彼らは青年期に発症し、20年に及ぶ長期入院により、それまでに培った友人や仕事を通じた仲間等とのつながりも途絶え、入院中に両親が他界するなど、多くの関係性を喪失し孤独を感じていた。地域で暮らしながらも、社会的なつながりが極めて限定され、孤独を感じるなかで、専門職をはじめとする多様なサポートを得て、病状を安定させ日常生活を維持していた。そのなかで、デイケア以外でも、デイケアメンバーを中心としたコミュニティの中で帰属感を得て、孤立せずに生活を送っていた。

これについて、先行研究を用いて生成した統合失調症患者のリカバリー概念と比較検討すると、**【自分自身を客観視し肯定的なセルフイメージをもつ】****【主体的に支援を活用し病状が安定する】****【新たな目標や願望を見つけ主体的に生活する】**については本研究結果と合致していたが、**【地域社会で相互関係を築き承認される】**ことについては、本研究対象者が実現するには課題があると考えられた。課題として挙げられた**【地域社会で相互関係を築き承認される】**を実現するためには、長期入院によ

り多くの関係性を喪失した当事者が地域コミュニティの一員として受け入れられるよう、海外で行われている入院早期からの就労支援や、専門職による地域住民と当事者の話合いの機会を設定することの重要性が示唆された。

審査結果の要旨

1. 研究課題の妥当性と保健学としての意義

病院から地域へ医療を移行する「脱施設化」が世界的傾向のなかで、日本においても「精神障害者地域移行・地域定着支援事業」が政策として推進されているにも関わらず、地域移行が進みにくい現状に着目し、社会的にも重要な研究課題を設定している。精神障害者の地域移行において、当事者の意向や生活実態が反映されにくい現状の中で、長期入院を経験した中高年期の統合失調症患者の生活の場に研究者が身を置き、その実態を当事者の視点から記述することによって、リカバリー概念を用いた保健政策への実践的な提言がなされている。

2. 論文の構成と内容

国内外の豊富な文献検討により、研究を位置づけるとともに、専門家や当事者により多様な定義が存在しているリカバリー概念を規定したうえで、研究目的を設定している。

研究方法は文化人類学的手法の一つであるエスノグラフィーを用い、正確で豊富な語りを得ることが難しいとされる対象者の特性を考慮し、予備的フィールドワークにより彼らと関係性を構築した上で、1年以上に及ぶデイケアにおける参加観察や家庭訪問によるインタビューを行い、「彼らが彼らの世界をどう見ているかを真に理解すること」を探求し続けた貴重な論文である。

結果は長期入院を経験し、デイケアを長期利用する中高年期男性の統合失調症患者の生活やコミュニティとのつながりについて、当事者の視点に迫りながらリアリティをもって描かれている。

考察では研究者自らが規定したリカバリー概念を用い、青年期に発症したことにより、それまで培ってきた家族や友人との関係性や仕事も失い、その関係性を再構築できないまま、退院後もデイケアというコミュニティに帰属しながら、地域コミュニティとつながることへの難しさと課題が記述されている。

3. 論文の一貫性

序論から研究目的、方法、結果、考察までに至る論旨は一貫しており整合性がある。論述の科学的根拠の提示も適切である。

4. 情報発信能力

研究成果を分かりやすくスライドにまとめ、研究内容を十分理解した上で明確に発表を行っており、審査委員からの質問に対しても真摯な態度で的確に回答していた。

以上、国内外の良質な文献検討を行っていること、臨床現場と対象者の生活の場におけるフィールドワークを十分に行い、当事者の視点に迫りながら、長期入院を経験した中高年期の男性統合失調症患者の孤独とデイケアメンバーや地域コミュニティとのつながりを記述している点が評価された。さらに、精神保健において国内外で注目されているリカバリー概念を用いて検討したことにより、リカバリープロセスを支援する上で具体的な課題が示されていることから、実践においても有用な示唆を与える研究であると評価された。

審査の結果，論文審査委員4名の意見として，本論文は学位規則第4条第1項に定める博士（保健学）の学位を授与するに値する水準に達していると判定した。